

2019.11.3 第1主日聖餐礼拝

ネヘミヤ 8:9-12 「聖なる日を喜ぶ」

聖書

- 9 総督であるネヘミヤと、祭司であり学者であるエズラと、民に解き明かすレビ人たちは、民全体に向かって言った。「今日は、あなたがたの神、主にとって聖なる日である。悲しんではならない。泣いてはならない。」民が律法のことばを聞いたときに、みな泣いていたからである。
- 10 さらに、彼は彼らに言った。「行って、ごちそうを食べ、甘いぶどう酒を飲みなさい。何も用意できなかった人には食べ物を贈りなさい。今日は、私たちの主にとって聖なる日である。悲しんではならない。主を喜ぶことは、あなたがたの力だからだ。」
- 11 レビ人たちも、民全体を静めながら言った。「静まりなさい。今日は聖なる日だから。悲しんではならない。」
- 12 こうして、民はみな帰って行き、食べたり飲んだり、ごちそうを贈ったりして、大いに喜んだ。教えられたことを理解したからである。

はじめに

今日の礼拝でネヘミヤ記の学びを締め括ります。先週までに1~6章を4回に亘って学び、7~13章までが残されていますが、これを今日1回でまとめて締め括ります。7章以降はエルサレムの城壁が再建された後の民の様子（生活）が記されていますが、その中で特に注目したいのが今日のテキストとした箇所です。城壁が完成したとき、イスラエルの民は泣きました。「みな泣いていた」（9節）ののですが、涙の理由は何だと思いませんか。完成した感動の涙でしょうか。いいえ、そうではありません。彼らが流した涙は悲しみの涙であり、悔い改めの涙でした。この涙の背後にある思いを私たちも一緒に受け止め、今週の糧とさせていただきます。

1. 律法の本を求める民

1517年マルティン・ルターによって宗教改革が行われ、カトリック教会から別れてプロテスタント教会が生まれました。宗教改革のポイントは大きく3つありました。それは「聖書のみ」「信仰義認」「万人祭司」です。「聖書のみ」とは、伝承やローマ教皇のことばではなく聖書が信仰と生活の唯一の規範であるということです。「信仰義認」とは罪によって全的に墮落した人間が救われるのは救い主であるキリストを信じる信仰によるというものです。信じるだけで救われるのです。「万人祭司」とはすべての信仰者は祭司の務めを帯びており、神に祈り、神と交わり、神に仕えることができるというものです。これら3つをカトリック教会のあり方に対して異を唱え改革しようとしたのです。この3つはマルティン・ルターが初めて唱えたのではなく、すでに聖書の中に神の民である者のあり方として記されているものであり、ルターは原点に立ち帰ろうとしたのです。その中の一つ「聖書のみ」という点が、今日彼らが流した涙の背後にあるのです。

2. 器は完成した、しかし中身が

城壁が完成したというのは、器が完成しただけであって、まだ器の中身が整っていないことに民は気づきました。その中身が「モーセの律法の書」である神のみことばでした。8:1を見ますと、「民全体が一斉に水の門の前の広場に集まって来た。そして彼らは、主がイスラエルに命じたモーセの律法の書を持って来るように、学者エズラに言った。」とあります。神のみことばを聞きたいという思いが民の側から出てきたのです。神のみことばは私たちの信仰と生活の唯一の規範です。正典や規範のことを canon（キャノン）と言いますが、生き方の規範となる物差しを器の中に注いで初めて「完成した」と言えるのです。

このことは私たちの生活にも関わってきます。私たちが人として生きるために、神のみことばを注いでいただかなければならないのです。キリストの弟子のヨハネは「初めにことばがあった。ことばは神とともにあった。ことばは神であった。…この方にはいのちがあった。このいのちは人の光であった。」(ヨハネ 1:1, 4) と言い、ことばである神がいのちとなって私たちの内

におられるときに、私たちは神に愛され、神によって造られた人として生きることができるのです。イスラエルの民が城壁の完成をもって完成としなかったところに、今の私たちの生き方はどうなのだろうかと問われる思いです。神のみことばである聖書が、私たちを支え、生かし、強くする力であることを経験できますように。みことばを大切に歩むお互いでありましょう。

3. 涙の理由

みことばが朗読されたとき、民はみな泣きました。それは民がみことばに飢え渴いていたからです。バビロン捕囚から戻った民は長い間みことばを聞くことがなく、心が渴いていたのです。その渴いた心に、「モーセの律法」が語られました。「モーセの律法」には、神さまがご自分の民としてイスラエルを選び、愛と祝福を注いで来られたことの歴史が書かれており、一方で神さまに不服従だった人間の罪の歴史も書かれています。これを聞いたとき民は、自分たちはこんなに神さまに愛されてきたのに、神さまに従うことをせず、不信仰の結果としてバビロン捕囚に遭ったことを思い返し、何と罪深いものなのかを知らされたのです。そのような罪深い者であるにもかかわらず、神さまは見捨てないであわれみ続けてくださったことに深い感謝を覚えたのです。何度となく神さまに逆らい、不信の罪を重ね、神さまを悲しませて来た者ですので、捨てられても当然です。それなのに、神さまは私たちを捨てないだけでなく、何度も何度も助けの手を指し伸ばしてくださるのです。そうやって指し伸ばされた手をまた跳ね除けてしまう私たちがいるのですが、それでも手を指し伸ばしてくださる神さまがおられ、その神さまの愛と真実に圧倒されて、彼らは涙を流したのです。

民の涙は私たち自身、いや私自身の涙でもあるのです。先週木曜日の祈祷会で詩篇 130:3, 4 を開きました。「主よ。あなたがもし、不義に目を留められるなら、主よ、だれが御前に立てるでしょう。しかし、あなたが赦して下さるゆえに、あなたは人に恐れられます。」このみことばの前に私は深く悔い改め、涙しました。不義に不義を重ねた私を、主は今日赦しの中に迎え、礼拝へと招いてくださったことに深く感謝しています。パウロが告白したよう

に罪人のかしら（I テモテ 1:15）である私自身を主は赦し、愛をもって迎えてくださり、この後の聖餐の恵みに与らせてくださることに感謝します。

こうして流される悔い改めの涙を主はよく知っておられるので、「今日は、あなたがたの神、主にとって聖なる日である。悲しんではならない。泣いてはならない。」（9 節）、「主を喜ぶことは、あなたがたの力だからだ。」（10 節）と仰ってくださるのです。

4. この日は「聖なる日」

私たちが自分自身に悲しんで涙を流すとき、主は愛をもって赦してくださいます。それゆえに、赦された者として、もう悲しむ必要はないのです。自分の罪に涙する必要もないのです。主が私たちの悲しみを代わりに背負ってくださったからです。今日と言う日は、赦しの神さまによってすべての罪が赦された「聖なる日」です。私たちは毎週の礼拝に招かれていますが、それは裁かれるためではありません。裁かれるためではなく、赦された恵みを感謝し、喜ぶために礼拝に招かれているのです。この礼拝は、神さまの赦しが約束された「聖なる日」であり、赦された「喜びの日」なのです。「主を喜ぶことは、あなたがたの力だからだ。」（10 節）とありますように、力の限り赦しの神さまを喜び賛美しましょう。

結び

ネヘミヤは城壁を完成させましたが、それは器の完成だけを指して言ったのではなく、器の中に神のことば（モーセの律法）を注ぎ、民をみことばに生きる民として立たせて「完成」としたのです。人が神のみことばの前に立つ時、そこに映し出されるのは罪深い自分の姿であり、同時に罪深い私たちを赦してくださる神さまの愛です。神さまの大いなる赦しの前に、責められるものは一つもない私たちとして、この日を「聖なる日」として歩み続けましょう。